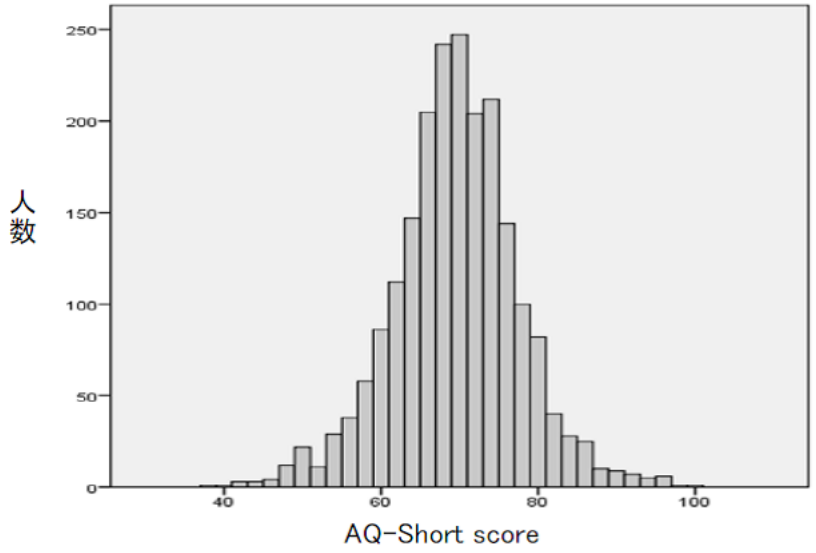
神経発達症の本質は何か：その1

2023年9月1日

いよいよメンタルヘルスに切り込みます。『そもそも論』第3回は「神経発達症の本質は何か」（その1）です。神経発達症neurodevelopmental disorderは最近まで「発達障害」と言っていましたが、「障害」にいろいろなもの（不調disorder、機能低下dysfunction、能力低下disability、社会的不利handicapなど）があるのと、また障害の「害」の字も気になるので、不調については「～症」で表現するようになってきています。

神経発達症の一つである自閉症autismの人を注意深く観察すると、「他人の気持ちを自分の気持ちと並べて考えることができない」という脳機能特性を持っていることがわかります。換言すれば「感情共有不全」とも言えます。当事者の言葉を借りれば、「他人は風景の一部である」です。その結果、自分独自の判断基準で行動してしまって身勝手に見える、場の空気が読めず忖度や配慮が苦手・・・といった現象が発生します。このような説明は医学・心理学の教科書や国際的な診断基準（DSMやICD）、一般の解説書には載っていないユニークなものですが、自閉症の本質やそれに伴う諸症状が理解しやすいのではないかと思います。

もう一つ重要なのは、「定型発達と神経発達症に二分することはできない」ということです。自閉症の質問票の一つであるAQ-shortを某企業の全従業員に行った宮木幸一先生の研究（添付の図）では、自閉性がほとんどない人から高度にある人まで連続的に分布していて、ほどほどにある人が最も多いという正規分布に近い形をしています。どこからが自閉症圏なのか、なかなか難しいですね。自閉症の関連遺伝子は多数見つかっており、それぞれの遺伝子の形質発現（1か0か）の総和として自閉性の度合いが決まること（統計学上の二項分布）は、身長や血圧と同様なのです。

次報でもう一つの神経発達症を説明します。メンタルヘルスについては拙著『職場のメンタルヘルス・マネジメント』（ちくま新書）でもう少し詳しく記述しています。